

この本をお読みになった方へお願い

あなたは、この本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。このほか、カッパ・ブックスでは、どんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町二の一

光文社

神吉晴夫

改訂 文学入門

昭和29年10月10日 初版発行 ①
昭和31年8月5日 24版発行
昭和31年12月1日 改訂1版発行
昭和45年4月5日 改訂24版発行

検印廃止

号 350

著者 伊藤 整
東京都杉並区久我山1-275
発行者 神吉晴夫
印刷者 山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所 東京都文京区音羽町2 株式会社 光文社
振替東京 115347 会社

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。
表紙の模様・意匠登録 116613

〔複本製本〕

文学入門

伊藤 整 著

序 文

私はさきに、自分が文学をどのようなものと考えるべきか、また自分の創作の態度をいかに定めるべきか、という問題を中心として、ヨーロッパの文学と日本の近代文学を比較しながら、「小説の方法」という本を書いた。私はその続編または発展として、いま、「小説の認識」という本を準備中である。

これらの二冊の本は、私が職業作家として、また文学批評家としての、専門の立場から書かれたものであるから、一般人にとっては難解なところが多い。私は、近年、一般人が文学というものを理解するのに役立つような、平易で、しかも根本問題にふれた本を一冊書きたい、という希望を抱いていた。

しかし、自分の考えを一つの体系としてまとめるには、多くの疑問点が残っていたので、いままで私はそれを書くことができなかった。いまでもまだ私は、長い間考えて来た文学の根本問題を、理論的にまったく解決したとは言われない。けれども、前記の二冊の本を書くことによって、自分流に一つの解決点に達したという考えを、私は昨年ごろから持つようになった。

それで、その間に得た結論のようなものを中心として、できるだけ分かりやすい形で、文学の

形式、その感動の働き、その文体、他の芸術との比較、という諸点からこの本を書いた。それゆえ、この本は、「文学入門」であると同時に、現在の私にとって、一つの文学結論でもある。

将来、私の考えは、さらに変わるかも知れないが、現在のところ、この本が、私の到達点である。広大で複雑な文学の問題は、もちろん、これで尽されてはいないが、その世界の解明の方法として、この本がいくらかでも人々の役に立つことを私は希望する。

一九五四年九月二十二日

伊 藤 整

(5) 改訂版について

改訂版について

本書が刊行されたのは、一九五四年十月であったが、版を重ねるにしたがつて、著者は、少しずつ訂正をし、また加筆をした。それは初版で三七頁（この新版三九頁、以下同様）、四八頁（五〇頁）、一二〇頁（一二二―一二三頁）、一六六頁（一七二―一七三頁）、二一八頁（二二五―二二六頁）などであった。

その後、何人かの読者から、叙述の曖昧あいまいな点について質問があり、また紹介した作品の筋書などについての著者の思い違いしている点を知らせて来た。また田中西二郎氏たなかにしじろうからは、彼の露伴解釈はろくわんかいしゃくの紹介について訂正の申し込みがあった。さらにこの書物を、著者の全集に入れるにあたって、芳賀義彦氏はがよしひこが、全体を読み直して、事実の相違しているところや、叙述の曖昧なところを指摘してくれた。それらの点を参考にして著者は、かなり多くの部分にわたって本書を訂正し、相当量の書き入れをした。

特に目だった改訂部分をあげると、旧版二四頁（新版二六頁、以下同様）、三〇頁（三二頁）、三一頁（三三頁）、三六頁（三八頁）、四二頁（四四頁）、四六頁（四八頁）、八四頁（八六頁）、九五頁（九七頁）、一〇七頁（一〇九頁）、一三八頁（一四二―一四三頁）、一四三頁（一四七―一四

八頁)、一四六頁(二五一頁)、一五四頁(一六〇一六二頁)、一九三頁(二〇二頁)、一九四(一九七頁(二〇二二〇五頁)、二〇五頁(二二三頁)、二〇九頁(二二七頁)、二二二頁(二三三二三四頁)、二三三頁(二四四二四五頁)、二四一頁(二五三頁)などである。

以上のように改訂した所は相当に多いが、著者の考え方や思想そのものに変化が起ったのではない。間違いを改め、曖昧さを消し、説明の不十分な点を補うことが、この改訂の本旨である。もともと、かなりむずかしい理論を平易に述べようとした書物であるので、これでもまだ十分に意をつくしたとは言われない。しかし光文社が、かねての約束にしたがって、十萬部を越えた機会に改訂版を出してくれたのは、ありがたいことであつた。前よりも自然な形で本書が読む人々に理解されることを著者は願っている。

一九五六年九月十一日

伊 藤 整

目 次

序	文	三
改訂版について		五
第一章 物語りの成立とその形式		二
1 物語りと宗教		二
2 初期の形式		一六
3 日本の並列形式		一九
4 集団の表現		二四
5 日本の感動の特質		二六
6 露伴の連環体形式		三一
第二章 悲劇と喜劇		三三
1 封建社会と悲劇		三五
2 ロマンティズムの衝動		三八
3 近代の始まりと笑いの文学		四三

第三章 近代社会と心理小説……………五二

1 宮廷生活と近代文学……………五一

2 日本の宮廷と遊里の文学……………五五

3 社交界と文学……………五七

4 社交界と人間性……………六三

5 フィクションとしての小説……………七〇

第四章 日本の近代社会と小説……………七五

1 「不如帰」……………七五

2 「金色夜叉」……………八〇

3 「緋文字」……………八七

4 社会の秩序と人間の感動……………八九

5 日本の近代社会と文士……………九四

第五章 芸術至上主義と私小説……………九七

1 個我の確立と芸術至上主義……………九七

2 芸術至上主義の反人間性……………一〇二

3 芸術至上主義から自然主義へ……………一〇五

4	日本の自然主義	109
5	島崎藤村の場合	110
6	逃亡的私小説	115
7	逃亡型から破滅型へ	123
第六章	近代人のエゴと小説形式	135
1	エゴの露出	135
2	調和への願ひ	141
第七章	論理と調和の文学	153
1	漱石と鷗外	153
2	白樺派の人々	162
3	プロレタリア文学	166
4	キリスト教とマルクス主義	169
第八章	下降認識と上昇認識	175
1	「城の崎にて」	175
2	小説の芸術性	189
3	長編小説の芸術性	194

4	死の意識による諸作品	一九八
5	人間の不安	二〇二
第九章		
	現代社会と人間	二〇九
1	近代文学のゆきづまり	二〇九
2	進歩という危機	二二六
3	組織と人間	二三三
第十章		
	芸術の本質	二二七
1	移転とリズム	二二七
2	芸術の進歩	二三八
3	物語りと詩と記録	二四三
あとがき		二五一
参考文献目		二五六
索引		

第一章 物語りの成立とその形式

1 物語りと宗教

物語りというものの起りは、多く宗教と関係があるらしい。神の心を静めるために物語りを神に捧げるとか、あるいは神の定めた人間の社会の秩序が、いかにこの世に行われているかということを見わすために物語りを作る、というような形式で始まるのが、どの国でも共通したこのようである。

たとえば、人類のもっとも古い物語りであるところのホーマアの「イリアード」や「オディッセイ」は、語り手の詩人が、詩歌の女神なるムーサ（ミューズ）を呼びだし、そのムーサに、語り手なる自分を支配して神の意図するところを語らせてくれ、と願う形で始まっている。物語り全体としては、トロイ戦争という、その当時の社会の大事件を表現することになっているけれども、その根本の動機は、神々の力を語り、神々をあがめ、人間が神の力に服従する有様を語ろうとするものようである。そのような神の祭の様式を保存するという考えが、後に変化して、語り伝えを楽しむ気持になる。文学という言葉の芸術を作る気持は、さらにその後に行ったことな

のである。

「イリアード」のような戦争物語りも、神を祭り神の力を語り伝える方法の発展したものである。語り手の多くは、戦争で盲目になったり片輪になったりした人々である。その人たちが乞食をして各地を歩きまわりながら、生計を立てるために、人を楽しませる、という形でこの叙事詩は歌われたものである。その語り手は、堅琴を一つ持って、それを弾きながら自分の経験した戦場の話を歌い、あるいは自分が直接経験者でなく、他の原因で盲目になった人にしても、師匠から聞いた話をそのまま語り伝えるという形式で習ったものである。日本では琵琶歌、祭文、浪花節の系統などがこれに近いものである。

日本では、源平の戦争の後などに失業した武士や、怪我をした武士や、盲目になった武士たちの中の、学問のある者が、その戦争の状況を語り伝えながら、僧侶の形で、各地を乞食して歩いた。そのうちに、それらの人々の体験がしだいに創作に形成され、修正されていって、「平家物語」とか「義経記」というようなものになった。それを語る人が琵琶法師と呼ばれる半分僧侶のような放浪の乞食であったことは、「イリアード」や「オディッセイ」の成立と似ている。「平家物語」は生仏という僧侶が原本を書いた、と言われているが、その前にもたぶん多くのエピソードの語り手があり、その成立後も多くの人の手によって、補われ、書き変えられた。それを語り伝えたのが、琵琶を持った乞食のような芸人であった。戦後日本に現われた戦傷軍人たちの歌や

演説のようなものが、ラジオも映画も芝居もない時代に、唯一の芸術として成長したものだと思えばよい。「オディッセイ」は、ギリシャを中心に、小アジア地方やエジプトやイタリアにかけての東地中海地方のいろいろな伝説が、主人公のオディッセウスの漂流談の経過の中に、つぎつぎと現われたことになっている。「義経記」では各地にあった英雄物語や宗教の縁起談が、兄に追われて各地を旅行した義経という人気のある人物の身の上につづったこととして作り直されて語られている。これは個人とその旅という長い一本の糸に、いろいろのエピソードをつないでゆく方法で、後に述べるスペインのピカレスク・ノヴェルというのや、江戸時代の十返舎一九の「膝栗毛」などの構造に似ている。

物語りは、初めは韻文の形で語られるのが一般的な習わしであった。物語りであって、同時に歌として人に聞かせるものであるから、自然にそうなのである。現在の芸術の中では、浪花節がこの形式を保存している。語りやすく、かつ歌いやすいことが必要であるから、韻律的な文体、日本語では七五調や五七調を主とした文体が採用される。それは歌うために必要であるばかりでなく、記憶されるためにも便利であるから、多く韻文体で作られたのである。それらの物語りの各部分がそれぞれの体験者や、体験者の弟子たちに口伝えに伝えられてゆくうちに、一つ一つのエピソード（小話または挿話）が、しだいに磨きあげられて変ってゆく。不要のところは削られ、おもしろい話が付け加えられて、作品としてだんだん完備したものになってゆく。そのよう

にして、源平の戦争に取材したいくつかのエピソードが、各地方に分散した語り手によって、小部分ずつ、しだいに芸術作品として、立派なものになる。すなわちよくできた短編小説のようなものが、各地にいくつもできる。

そうすると、ある時、一人の天才的な人間が出てきて、それらの作品全体を集めて一つの大きな物語りにしたならば、もっとおもしろいものになる、ということに気がつく。その人間は、これらのエピソードをつなぎあわせ、エピソードとエピソードの間の欠けているところを、自分で創作し、あるいは事情を調べて補い、全体として大きな物語りを作ることがある。

その時に、その採集者であり編集者である人間が一つの巨大な物語りを作りあげた、ということになってしまう。これが「平家物語」や「イリアード」や「オディッセイ」の成り立っただいたいの経過である。「イリアード」や「オディッセイ」を作ったといわれるホーマアという人間がいたかどうかは分からない。しかし、バラバラのいく種類ものエピソードをまとめあげて、それを自分の思想で一貫した物語りになるようにまとめあげた、才能のある人間がいたことは確かである。その人間が、これらの大きな叙事詩の作者と見なされる。ホーマアとかシェークスピアというのは、だいたいそのような人物である。

また、それと違って、ある町、あるいはある宮廷の中に、学問や才能のある人間がいると、その社会の中で前から語り伝えられているいくつかの話を、集めて書きとめるといようなことを

する人が出てくる。その人間は、さらにその話をおもしろく書き直す。たとえば、「今昔物語」とか「宇治拾遺物語」とか「聊齋志異」とか「デカメロン」(十日物語)というようなものは、これらの学問のある人間が、その社会の世間話や伝説を、独立した小話のまま一冊の本にまとめたものか、または自分の作った小話を、そのような形式を借りて編集したものである。

そういうものができると、それらの多くの物語りの中から、一つの系統をなす話題のものだけをつなぎ合わせて、そこに、それらのエピソードに共通している一人の主人公を作りだし、その主人公がそれらのいくつかのエピソードを経験したという物語りを作りあげることが起る。

そういう時は、そのような作品は、初めは、多分不完全な寄せ集めもの、という印象がまだ残っている作品であるに違いない。しかしその次に出てきた才能のある人間が、ある都会とか、ある宮廷に伝えられた物語りの群れを、さらに書きなおして、もっと統一のあるものにし、また各部分の描写を自分の見聞や、他の伝説などによって補い、全体として完全なものに仕あげてゆく。そういうような経験を何度かへて、物語りがしだいに部分において完備したものでありながら、それらの部分が互に連絡のある話になり、全体として一つの構造体を形成するようになる。「源氏物語」のような作品は、たぶん、そのようにして何代かの作者の手をへてから、紫式部という才能のある女性によってまとめあげられたものである。そのようなことをなし得る人、たとえばシェークスピアとか紫式部というような人は、学問や知識において優れているだけではたり